特集

大槌高校生が「魅せる」大槌

大槌高校の魅力化推進事業の一つ、「はま留学」。4月、第1期生となる本江紗羅（もとえさら）さんが入学し、下宿しながら3年間の学校生活をスタートします。小さい頃から自然が大好きだった本江さんは、昨年訪れた大槌で在校生が伝えてくれた、豊かな自然や人の温もりに魅力を感じ、入学を決めたと話します。ここでは、「はま留学」に関わった生徒や地域の人の言葉を通して、町の魅力に目を向けてみます。

魅力化を生徒と地域で

生徒たちは自分なりのテーマを見つけ、地域の人たちに学び、町の魅力を探求しています。

東京大学海洋研究所の協力による、「はま研究会」

地域での探究活動

大槌高校では、「大海を航（わた）る、大槌（ハンマー）を持とう」を合言葉に掲げ、大槌の地域性を生かした人材育成、学びの場を目指す「大槌高校魅力化プロジェクト」に取り組んでいます。生徒たちは、地域に入り込み、町の人たちと交流しながら自分の興味・関心のあるテーマを見つけ、探究する活動を行っています。

また、東京大学海洋研究所の協力の下、大槌の海に関する様々な事を学ぶ「はま研究会」や、ぼうさい甲子園（兵庫県などが主催）で三年連続入賞するなど高い評価を得る「復興研究会」など、生徒の主体的な活動によって、町の魅力や未来への展望を掘り起し、発信しています。

「はま留学」の取り組み

昨年度、全国から入学生を募集する「はま留学」がスタート。様々な背景を持つ生徒たちが共に学び、多様性あふれる学校を目指すこの取り組みでは、生徒たちが主体となって、町や学校の魅力のPRを行ってきました。そして今年度、第1期生となる、本江紗羅さんを埼玉県川越市から迎えました。

地域の人たちがサポート

留学生を受け入れ、のびのびと学べる環境づくりを地域の人たちもサポートしています。留学生の下宿先となるタカマス民宿を営む中村康子さんは、大槌高校からの呼び掛けを受けた際、復興事業の宿泊客が落ち着いてきた今、地域のために協力できることがあればと考え話を聞いたと言います。「本江さんは活発でしっかりした子なので、あまり心配せず、家族のように見守っていきたい」と笑顔で話します。

地域の人たちに見守られながら、新1年生を含めた大槌高校生の活動が今年度もスタートします。生徒たちは自分たちの目線で地域の中にテーマを見つけ、探究し、発信していきます。それは時に地域に暮らす私たちへ新たな発見や気づきを与えてくれるきっかけにもなります。

東谷（あずまや） いずみ さん
留学生支援員

おせっかいなお姉ちゃんのような気持ちで

卒業生が県外留学生の生活をサポート

大学卒業後、復興支援やゲストハウスの運営に携わった経験から、大槌に戻ってくる人や大槌で暮らしたい人を応援する仕事がしたいという気持ちを持っていました。今回「はま留学」の留学生支援員としてサポートできることがうれしいです。３年後にこの町に来てよかった、何か見つけられたと感じてもらうことが理想。学校生活を楽しみながら、この町で育っていない留学生の視点で気づいたことを町の人に直接伝えていってほしいと思います。

大高生が語る「まちの魅力」

留学生となった本江さんの心を動かしたのは、自分の町を愛し、誇らしげに語る先輩たちの姿でした。

小國尚人さん（3年）

本江紗羅さん（1年）
インタビューは裏表紙へ

三浦七夢さん（3年）

生徒主体のオープンスクール

「はま留学」の取り組みでは、遠方からの入学希望者が、学校や下宿先の見学、大槌町での暮らしを体験することにより、高校生活や「はま留学」についての理解を深めるため、大槌町内や大槌高校を見学するオープンスクールを開催しています。このオープンスクールでは、在校生自身が自分たちの声で大槌の魅力を説明したり、希望者の中学生を案内したりしています。

昨年度行われたオープンスクールで案内役を務め、今年度入学した本江さんとも実際に接した小國尚人さん（3年）に、大槌の一番の魅力について聞くと、豊かな自然だと言います。もともと海が好きで、「はま研究会」の活動にも参加している小國さん。「海はもちろんですが、新山など山もきれいだし、沢で遊ぶことも楽しい。色んな生き物もたくさんいます」と目を輝かせます。

同じくオープンスクールに携わった三浦七夢さん（3年）は、県外の人に伝えたい魅力をこう語ります。

「小さな町なので、中々言葉で表すのは難しいですが、好きな場所がたくさんあります。実際に足を運んでもらって、蓬莱島などの有名な場所や文化交流センターおしゃっちの様に人が集まる場所を見せたいです。オープンスクールの時も、浪板海岸でサーフィンをしている人たちを見に、花ホテルはまぎくへ案内しました」

留学生に届いた地元愛

地元高校生に案内してもらったオープンスクールについて、本江さんはとても楽しかったと話します。「川で虫や魚の名前を教えてくれたり、たくさん話しかけてくれたりして、とても面白い時間でした。こんなに地元を愛しているなんて、なかなかないと驚きました。私もこの中に入って、外の人を巻き込んでいきたいと思いました。」

三浦さんは、埼玉から初めてやって来た本江さんが1日目から、大槌高校に入るのを決めたと言ってくれたことがとてもうれしかったと言います。「進学先を探している中で、大槌を選んでくれた。大槌は人が少ないけれど、だからこそいろんなことができると思うし、紗羅ちゃんにはそれが似合う。行動力があるので、周りに影響を与えながら、大高で自分の好きなように活動していってほしい。」

小國さんも、「最初は時間がたくさんあるような気になるけれど、3年間はあっという間。後悔という文字がよぎらないように、がんばってほしいです」とエールを送ります。

誇るべき地元高校生の姿

大槌の魅力発信に生き生きと取り組んできた在校生や、この町を新たな学びの場として選んでくれた県外留学生の言葉は、私たちが普段当たり前だと思っていた大槌の魅力に気づかせてくれます。そして、目を輝かせながら大槌の良さを語ってくれる地元高校生の姿こそ、何よりも誇るべき地域の魅力ではないでしょうか。大槌を愛する心を生徒たちに学びながら、改めて自分が暮らす町について思いを巡らせてみましょう。

（写真上）蓬莱島を目の前に釣り体験
（写真下）東京大学海洋研究所で大槌の海について体験学習

大槌高校YouTubeチャンネルでは
PR動画を公開中です

地域を愛し、地域に愛されている生徒たち

オープンスクールでの生徒たちの姿を見ていると、こんなに町の魅力を語ることができるんだと驚かされます。誰かに言わされているのではなく、データには見えない様な魅力をキラキラした表情で話しています。

大槌高校の生徒たちは、地域に愛されているし、地域を愛していると感じます。地域での、お互いの顔が見える距離感や、郷土芸能に慣れ親しんでいることが大きいのではと思います。そんな先輩や友達の中で、紗羅さんにはぜひのびのびと頑張ってもらいたいです。それは第1期生の特権でもあります。そして私も一緒に大槌のことを学んでいけたらと思っています。

木村有里さん
1学年担任・復興研究会顧問